

「うらぎりひめ」コメント（2013年4月10日まで／新寄稿順）

はじめまして、私は神沢敦子という者で、3月8日に映画「うらぎりひめ」と「夏の家族」を見させていただいた者です。感動したので思いを何か伝えたいと思い、しばらく同席させていただいたのにうまく話せず、むしろご迷惑をかけてしまったかもしれない者です。

本当はすぐにも感想をお送りしたかったのですが、いろいろとたてこんでいて、メッセージが随分と遅れてしまいました。上映の後に「感想をメッセージでいただけると嬉しい」とおっしゃっていた記憶があるので、遅ればせながらも感想お送りいたしますね。

「うらぎりひめ」、とても感動しました。あまりにも複雑な映画だと思いますので、詳細に意味を解釈していく事は私には全くできませんが、映画の画面から光がやってきて私の内側へと吸収されていくのをありありと感じたので、その自分自身の感触を、語らせていただけたらと思います。

ひょっとしたら、作者が伝えたかった事とは違うかもしれない、表現しているものの一部だけが受信されたのかもしれない気もするのですが、私は「うらぎりひめ」と「夏の家族」を見て、両作品とも死と再生の映画であると感じました。そして観客の私に「命」のエネルギーを確実に与えて、蘇らせてくれました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

ホームページの「私の映画について」の中で、「311もしくは福島事故に関して私の映画の主題は「再生や希望や復興」ではなくはっきり申して「憎しみ」です。そしてそこから発する当事者の孤独性、罪の意識—あがないを描きたいと思いました。」と、ありますね。

なのに勝手に「再生」の力を得てしまって申し訳ないような気もしますが、私は「憎しみ」や「悲しみ」は物凄いものを持っていますが、罪の意識やあがないの思いは運命的に持ち合わせない星の下に生まれ合わせたようなので、「憎しみ」も「悲しみ」もそのものが「再生」のためのエネルギーであり、光になるのだという風に、感じたのです。

「うらぎりひめ」は、「死の権力 VS 命の刃」の戦いの映画と感じました。その戦いは、個人の心の中でも、世界中においても戦われている戦いでしょう。

座敷牢に通って来る男は「死の権力」そのものであるし、女は「命の刃」そのもののような存在でしょう。座敷牢はある種の魔術的空間であり、その中での戦いが、第二次大戦の行く末とシンクロしているように思われました。

閉ざされた座敷牢、暴力によって囚われた肉体、絶えず犯され続ける事によって、自らの肉体ですら牢獄であることを思い知らされる、徹底的な無力と孤独と受動の中で、命のエネルギーは沈黙の唇たる一点に集中し（口は呼吸の場所）、ナイフの切っ先のように研ぎすまされていきながら、最大のテンションにおいてしっかりと確かめられ、霊的力に満ちていく。

この世に存在する、自身の肉体をも含めた全ての外部から攻撃され、内へ内へ底へ底へと沈黙して行った命の行き着く果てには、生者も死者も他者も過去も未来も皆つながっているような、心そのもの・命の奔流そのものの場所への、魂の扉がある。

その扉は、恥辱と惨めさと汚れの象徴のような扉（便器の蓋）でありながら、実はそれこそが、尊厳と充実と純潔への扉であり、それを開けば、最小化された命が、無限の命と出会う。

そこは、全ての現世的心理・しがらみが焼き尽くされたがゆえに純化された、純粋な心の世界。純化された情熱の炎のみが燃え盛り、魂の太陽が燃え、世界の心臓が血しぶきをあげている。

その中で死は再生し、死者は生者のうちに蘇り、痛みと苦悩のテンションはそのまま、歓喜の光に到達する。

一点集中した命の刃の霊的殺意によって、死は倒される。

孤独の中で純化され、個を超え全ての魂とつながった純潔な情熱の炎によって命はよみがえり、魂が命に重なり、命が魂に重なり、キラキラと輝く。

包帯が流れ去り、手の平に「命」の文字の現れる場面の、眩しい太陽光の霊的輝きに、私は思わず涙ぐんでしまいました。

この世において少なくとも物理的には、「死の権力」は圧倒的に強く、命は絶対的弱者と思い

ます。命はいつだって、死によって一方的に犯され、殺され続けて来た。

けれども命は、その弱さゆえ最小化される事によって魂の扉を開き逆に蘇るのだと、映画から受けた感動によって、確認させていただきました。

この、戦時中の一女性の死と再生の過程は、第二次世界大戦の過程とも重なり合っていますね。これは、女性が生者も死者も他者も皆つながり合っているような世界の心臓＝神の領域に到達して、純粋な命を獲得したからには、当然のことでしょう。

私は、戦争や原子爆弾投下や原発事故などの災厄には、二重の側面があると感じています。一つは、悪魔の呪い、「死の権力」の人類支配としての側面であり、もう一つは、神の怒り、「魂の世界」の噴火としての側面です。

それは、「死の権力」の生に対する攻撃であると同時に、「命の刃」の死に対する攻撃でもある。

つまり、災厄は悪魔が起こすものであると同時に、神が起こすものでもある。災厄そのものの中で、悪魔の力と神の力とが戦っている。災厄こそが、悪魔と神の戦いの具現化そのもの、「死の権力」と「命の刃」の戦いそのもの、死と再生の秘儀そのものなのだとと言えるかもしれません。

そして、その災厄（第二次世界大戦や原発事故）を霊的に生き抜こうとしているこの作品もまた、死と再生の秘儀そのものなのではないかと感じました。

第二次大戦下において一人の女性が、死の支配力に打ち勝って死者と共に再生し、歴史は戦争の痛手に打ち勝った。

けれども、歴史は繰り返すわけですね。かつて死に打ち勝ち孤独の中で純化された命は、長年の社会生活の中で再び死の権力への従属に汚れ、その汚れの当然の帰結のごとく、あるいは汚れを裁くのごとく、いまや原発事故が起きてしまった。

そして老婆となった女性は再びその魂において、死の支配力との戦いを、死と再生の秘儀を、全身全霊かけてやり直そうとする……。

私は、弱者を陵辱し虐げることは、すなわち命の否定であり、死の権力に魂を売り渡すことだと、思っています。

なぜなら、命の本質とは、「物理的にどこまでも弱い。ゆえに霊的にはどこまでも強い。」「物理的にはどこまでも孤独。ゆえに霊的には全ての他者とつながっている。」ということであり、弱者や孤独者の姿にこそ、命の本質が顕現していると思うからです。

戦後、社会は、そして社会適応した社会人達は、弱者や孤独者を断罪し、虐げ続けてきました。そのことによって「死の権力」はどんどん肥大化し、私達は生きながらにして、霊的には死んでいった。

だから、原発事故が起きたのは、必然的だと思います。

死は権力によって生を打ち負かします。けれども生は、霊力によって死に勝利します。

今こそ、「死の権力」によって徹底的に追いつめられて行く「命の刃」は、その切っ先を再び研ぎすまさねばならない。

そのためには全てを捨てて孤独になり、なんとなれば物理的命さえ捨てて、命のテンションを極限まで一点集中して、無力の純粹さのうちに自らを浄化し、再生を勝ち取らねばならない。

実は私は震災前、「殺人 ーこんな世界は最悪だ。もう殺すしかない。ー」とか「殺人2 ー殺人から革命へー」などと題してイベントを主催し、『聖ファシズム宣言』という自らの思想表明を書き進めながら、「涙の党」の結成をもくろんでいました。

それが震災後の不運の連続によって、全てできない状態になってしまいました。精神も肉体も弱り、支持者達までがうとましくなり、何もできない孤独（一人ではありませんが）の中に、落ち込んでしまったのです。

そんな時にこの映画を見させていただき、派手に活動する事よりも、今の孤独と無力の方が実は大切な魂の戦いなのかもしれないと、感じさせてもらえました。本当にありがたいです。

映画の最後の場面も、感動的でした。爆音の連続とともに血しぶきの爆発的噴出のような影が映し出される場面は、命の情熱そのものであるような魂の姿、世界の底に渦巻いている霊力の姿、個を超えた世界の心臓の鼓動を、顕現させているものと、感じました。

「うらざりひめ」の女性もまた、そのような魂や霊そのものが、人間のうちに結晶化したような存在ですね。魂や霊はそれが解放されたとき、本当にキラキラと眩しく輝く。

その輝きを、映像も非常によくとらえていると感じましたし、また音楽の弦楽セレナーデが、これほどキラキラと眩しく聞こえたことも、なかったです。

「夏の家族」にも、霊的な光の眩しさを感じる映像がふんだんに出てきました。そして私にはこの映画もまた、死と再生の秘儀そのものであるように感じられました。

木の人形も私には、不気味さよりも、死からやって来る命の力強さのようなものの方が強く感じられ、死から命がやって来る、闇から光がやってくるのだと、胸の鏡のきらめく反射光に再生を感じ、祝福を確信したのでした。

即物的なありのままのセックス映像については、「大いに撮るべし」と思いました。なぜなら「恥」というものが「死の権力」を形作っているものだと、思うからです。

現今の人間は、「ちゃんとした人間」「恥ずかしくない人間」であるためになら、何百万人・何千万人殺したってかまわない、地球一個ぐらい吹き飛ばしたって「恥ずかしくない人間」であろうとするのが人としてのあるべき姿だと、信じて疑わないような人間達ばかりですね。

だけどそのような狂った恥と名誉の観念こそが、「死の権力」を肥大化させるために悪魔達の流布した「死の原理」だと、私は思うのです。皆がそんなものに囚われている限り、命は再生できない。

だから、恥と名誉の観念を無視し破壊することが、命の尊厳の復活にとって、絶対的に必要だと感じています。

名誉と尊厳とは、相反するものであり、私達は真の尊厳に目覚めなければ、「死の権力」に滅ぼされてしまうでしょう。

これは余談になってしまうと自分でも思いますが、「うらぎりひめ」の最後の場面の血しぶきは、アニメ「エヴァンゲリオン」の暴走するエヴァの咆哮や光の巨人の破壊光と同じ何かを現しており、戦時下で死と再生を生き抜く、魂そのものの顕現のような女性の姿は、押井守がいろんなアニメ作品の中で繰り返し描いて来た「少女霊ゴースト」と同じ何かを、現しているのではないかと、ふと思いました。

「エヴァンゲリオン」や押井守のアニメも、魂の死と再生を目指している作品と感じますが、なかなか再生にいたりつかず、作品自体が「死の権力」に負け続け、魂は青白き霊として扉の向こうをさまよい続けている、そんな気がしてなりません。

それに比べて、「うらぎりひめ」や「夏の家族」は、作品自体が「死の権力」に勝利していると、そんな風に感じました。

それは、作者の魂がどれだけ「死の権力」に打ち勝っているかが大いにあると思うのですが、もう一つ、実写の力というのもあるのかもしれないなど、思いました。

生身の人間の肉体の生々しさが、「祭」としての作品磁場にエネルギーを流し込むために、不可欠であるのかもしれませんが。

特に舞踏家が監督した作品であればこそ、肉体の生々しさを十全に生かききって、魂の再生を真に実現する作品と、なり得ているのではないのでしょうか。

長々と書いてしまいましたが、まるきり作者の意図とはかけ離れたような受け取り方を、私はしてしまっているかもしれません。けれども映画が私にどのように作用したかについて、私なりに正直に語るしかないと思いました。

最後に、せめて普通レベルの金銭的豊かさがあつたなら、ぜひ援助したいと思わせてくれた映画だったことを、言っておきたいと思います。

このような、真に生きる事に直結したような芸術作品を作り続けて行く事が困難な状況には、たとえてみれば、決してないがしろにされてはならない神社仏閣が壊されていくのと、同じ危険を感じます。

商業主義にのれない芸術作品を価値なきものとして迫害し続けていると、必ずや悪魔の呪いと神の祟りとを同時に呼び寄せ、様々な災厄を引き起こす事となるでしょう。

それを思うと、援助しなければと強く思うのですが、あまりにも自分の生活が危ういので、今はそれができません。それについては本当に、謝りたい気持ちで一杯です。非常に遺憾です。

せめて心の中で、精一杯支援したいと思っています。また作品を上映なさるときには、できる限り見に行きたいと思っています。

今回は真によいものを見せていただき、本当にありがとうございました。

4月10日・私信 神沢敦子

岩名雅記さま

2013/03/12

先日は、『うらぎりひめ』を拝見し、その折は次に予定ありで、お話しする時間がありませんでした。パンフレットも読み、そこからもいろいろと学びました。三作目は、ずいぶんと洗練されたなというのが率直な感想です。もっとも、二作目は拝見していませんが……。

何と言っても、性（性交）の映像表現が柔らかく、温かくなっているというのが印象的です。『朱霊たち』では、暴力と快楽の性という表現でしたが、この作では全く違いました。それは、岩名さんが新しい命と出会ったことにあるのではないかと想像しました。性と生命の繋がりはともすると忘れられがちです。が、実は最も大切な視点です。

終わりに近い方でしたか、小さな男の子と母親と思われるふたりのじゃがいも畑のシーンがありました。あれが入れられたことでこの作品の賛否が問われるのではないかと思います。私はどちらかと言うと否ですね。あそこがこの『うらぎりひめ』を私的なものにしてしまったと……。それまでがこの現代を鋭く見据えていたのに、甘い表現に落としてしまったと感じました。

また、最後のクレジットに、岩名家とあったこともびっくりでした。私より若い岩名さんが～という感じです。この安倍政権は、戦前に戻そうとしているのが実態です。つまり、家制度、家父長制、戸籍制度の強調も復活するかもしれないという現代です。あの部分は、岩名〇〇子、岩名〇〇（幼子）と名前を載せる方が、個を尊重するという意味で正しいのではないかと感じ

ました。私自身は、戸籍ではなく個籍であるべきと考えています。

と、慌ただしく書いてしまいましたが、見当違いのことかもしれません。お許し下さい。

舞踊表現と映画表現を一人の人間が追求することの困難に、果敢に挑戦していることに敬意を表します。

地球の大切な自然が壊されてしまったことに、本当に憤りを覚えています。どこの国にいても、向かう方向は変わりません。3. 11に向けてのデモや何やかやで体力消耗、しかし、止めるわけにはいきません。そんなこんなで、このようなメールをお送りします。

こちらは、もうすぐ桜の季節です。ご覧になってからお帰りでしょうか。

では！

私信・堀切絃子（舞踊研究・評論／JK ダンスアトリエ主宰）

二度めの観賞。やはり、ちからづよくもうつくしい作品だったし、とくに冒頭でかたられる「つよさとしての孤独」というのは、ラストまでうらぎられないメッセージとしてころにつよくひびいた。

わたしも孤独を恐れるものではないつもりだけれども、「つよさ」ということではなはだころもとないものしかもっていない。いままで、ころならずも自分をうらぎったり、自暴自棄的に自分をうらぎってきたことはなんどもあるけれども、みずからをうらぎる意志をもって行動するということについても、かんがえてみよう。 小坂圭司（イベント crosstalk 主宰）

フランス在住の舞踊家で、映画監督でもある
岩名雅記が手掛けた『夏の家族』『朱霊たち』に続く
長編劇映画第三弾。

今、日本国が支配されている、見せかけの平和や価値観を、
舞踏表現や、自慰行為や、自己と雪隠との関係性の中に
身を投じてゆく主人公の姿に重ね、眼前に突きつける。
前衛的に表現された、ファンタジックな思想映画だ。

老練舞台女優で、人生論の文筆家でもある T（86歳）は、
双光旭日章の受賞を機に作られるという、自分の特別番組放送の為
放送局のインタビューを受けた。

同時に、その中で放送される T をモデルに製作された中編映画

「うらぎりひめ」の監修も依頼される。

戦中の経験のエッセーをもとに作られた映画。

このことで、67年前の忌わしい記憶が鮮やかに蘇ってしまった T は、

預かった DVD を鉄路に投げ捨ててしまう。

そして、いつもの公園である行動に出る…。

断片的な映像のコラージュで、一人の老女の孤独な魂の闘いを見せる。

東日本大震災と原発事故以後、それ以前の戦後から変貌を遂げてきた

日本人の心を鑑みて 作品を完成させた。

監督作品は、ロッテルダム国際映画祭などで評価されている。

日本を遠く離れ、ノルマンディの風に吹かれながら厳しい自然と暮らす岩名監督。

外から鳥瞰するからこそ見える 日本国への「憂い」

それが伝わる秀作である。

寄稿・浅尾典彦（メディアライター、夢人塔 代表）

岩名雅記監督は、1992年に三谷の路上を移動しながら行った「三谷演劇フェスティバル」以来の知人であり、監督の一作目の舞踏劇映画「朱霊たち」に出演させていただいたり、2012年に慶応大学の新生歓迎公演でデュオ公演をしたり等、ご縁があり親しくおつきあいさせていただいた関係である。

なので客観性を正しく持ち感想を書く事が可能なのか自分でも若干の疑念があるが、自分が見聞きしたものに対して外部にフィードバックするということの責任と重要性を感じる為、僭越ながら感想を書く事にした。

2011年3月11日の大震災とそれに続く原発事故により、日本中が震撼し、人々は否応無く価値観の転換を求められた。今現在、一時の平穏（と思われる）に甘んじている人々の心の奥底にも、あの311の大地の神の怒りの渦に飲み込まれた罪無き心美しい人々の魂に手を合わせ祈る気持ち、そして人の世の儂さは拭いがたく刻印されているだろう。

日本人は、戦後原爆の惨禍から立ち上がりたくましく生きて経済発展を遂げたが、その過程に於いて、置き去りにされ忘れ去られたものがあり、つつましい生活の中で互いに思いやり助け合ってきた美德が失われてしまったというメッセージが強く映画の中で表現されている。そしてそれは、単なるプロパガンダ的な、原発推進派へのアジテーションに終わらず、岩名世界の美意識と身体感覚が宝石のように散りばめられ暗い輝きを放っている。

全体的にはそのような印象を持った映画だった。

だがしかし、自然や肉体達の美的な映像により命の美しさ、リアルな身体感覚が表現されているのも関わらず、それらが、前述の、金儲け主義に洗脳されてしまった日本人が再び取り戻すべき美德や命の大切さの問題提起が、見終わった後で空中の手の届かぬところに浮かんでいるといった印象も拭えないのだ。

実に面白い映画であったが、心にダイレクトに響いてこないのは何故だろう。

そのことをあれこれ考えていて思い当たったのは、まず言葉と身体というものの関係性であった。

過去のパートでは、ほとんど言葉は用いられず、リアルな身体表現と息づかいと叫び声のみである。

過去のパートは老女の追想であり、ほとんどの場面は幽閉された館の中での出来事であるので言葉は必要ないと思われる。

幽閉された人というモチーフは「朱霊たち」でも使われていたが、そこでは外部と遮断されてひたすら自己と向き合い続けなくてはならない孤独な人間が存在し、「孤独であれ」というもう一つの重要なテーマになっている。

外部との関係性は館という肉体に開いた穴のような窓から見える無垢なる自然の風景、飛び込んで来る雀、植物の種、彼女を幽閉し、食料を持って通って来る性的関係を強要する男、等である。

そして、便器の蓋を開けると、そこは彼女の脳内の光景がフラッシュのように現れる。つまり外部と内部の入り交じった混沌の世界である。

これら館の出来事は実に美しく丁寧に描かれているのだが、彼女が自力で館からの脱出を果たして外の世界に出た後の自然の風景は何故か薄まって見えたのは何故だろう。触れることのできない外部だからこそ心の中で凝縮された美というものがあつたのかと思う。

そこから彼女は現実の世界で生活を営み始め、その現実の世界に於いて身体よりも言葉が中心となるのだ。つまり現実の社会では他との関係性に於いて言葉というものが大きな位置を占めるという事だ。

もちろんこの映画では日本語の歌や語りが多く使われそれが音楽的な効果を上げていて、監督の言語音声へのこだわりが伝わってくる。

私が違和感を感じたのは老女の演説場面かもしれない。この演説場面の演出も絵的には美しいし、その音声も違和感がないのだが、内容が説明的過ぎはしないだろうか？ どうも唐突に感じてしまうのである。ここでは言語は説明を目的としたものになる為、私にとっては身体がはぐれてしまったのだろう。

それと、前に帰してもう一つ思い当たったのは、この映画に於いては、幽閉されて館という個人の肉体の穴から覗き見、憧れ、ファンタジーとして捉えた世界の方が強いのだという事である。それは「孤独であれ」という強いメッセージを放つ岩名雅記という人のリアルな現実なのではないだろうか。

そこに、岩名雅記という一人の舞踏家の表現の特質を見ることができるような気がする。そしてそこが手の届かないところに浮かんでいる感覚に繋がったのかもしれない。

実を言うと、その強さだけで最後まで突っ走って欲しかったが、より開かれた映画にする為の構成であり演出なのだろうか。また、戦後、そして 311 以降の日本を憂慮し、憤りを感じるが故の彼なりのメッセージ性を強めるためのことであつたのだろうか。

寄稿・長岡ゆり（舞踏家）

映画『うらぎりひめ』DVDにて再見。

なんと、必然性に満ちた映像群。

人は、排泄し、食し、まぐあう。それが「命」。「命」を獲得する映画。それらは、よくもわるくも、時代の影響にある。いや、それらが時代に影響するのか。おれは今、どんなセックスをするのだろうか。

体は、そして、自然であり、社会であり、建物だ。体を見つめ、突き詰めてきた岩名雅記でしか、この映画表現はなし得なかつたであろうと思う。また、日本を離れ、ある「孤独」を生きてきたモノだけが撮れた映画だと思う。

少なくとも、このような体へのアプローチを感じる映画を僕は知らない。それほどまでに、この映画において、体とほかのものとは等価だった。

だからこそ、小さな画面ではなく、ぜひ映画館や劇場で見て欲しいし、おれはそこで見てみたい。

今、読んでいる（といってもまだ数ページだが）佐々木中の『切りとれ、あの祈る手を』の中の「誰の手下にもならなかつたし、手下にしなかつたもの」という言葉を思い出す。

（3月3日・Face Bookより転載 田村 久：広島上映担当）

フランス在住で活動の拠点をヨーロッパに置く岩名さんの日本に寄せる想いの詰まった映画ですね。その想いの強さが静かな怒りに転じて、いま、此処にいる私たちの胸元に突きつけられている気さえする。老婆の姿で象徴されているのはこの国の風土や歴史なのだろうか・・・映画は老婆の独白で記憶と現実、過去と現在が交錯して進められる。独白を聴いていると岩名の想いが静かに伝わってくるような気がする。「黙っていていいのか？ 恥ずかしくないのか？」

「恥ずかしくないのか」と淡々と語る老婆はプラトン描くところのソクラテスと二重写しになっていますね。そもそも言説とは人々に取って耳あたりの良いことを並べ立てるのではなく、耳を塞ぎ目をつむりたくなるような現実の一面を曝け出すことにこそその本領を発揮するものであったはず。岩名さんは映画という形でそれを行ったのだ。

Face Book より転載 坂田英一（写真家）

冠省

昨日(3/2)は、森羅万象に宿る命の叫びに身を委ね、非常に満ち足りた非日常的な刺激的な時間に浸ることができましたことを心より感謝申し上げます。お礼の気持ちを込めまして所感を述べさせていただきます。

昨日、何年かぶりに岩名さんの舞踏に出会った気がいたします。確か岩名さんの舞踏に初めて遭遇したのは、1970年代の後期か或いは1980年代前半のことであったかと記憶しておりますが、その後公演のご案内をいただいた折には、伺えるときには何度か岩名さんの舞台に触れさせていただきました。それらの舞踏の断片が、今でも鮮明に脳裏を過ぎります。今回の岩名さんの舞踏は、時間も短く非常にシンプルな舞ではありましたが、それまで私が触れた岩名さんの舞踏とは明確に違っておりました。

それまでの舞台は、花と申したらよいのでしょうか、どこことなく華やいで熱き生のエネルギーに満ちた内的なカオスが漲り、その魂は日常的な肉体を引き摺りながら何かを求める行者の態をなしておりましたが、昨日触れた岩名さんの舞踏における身体の在りようは、これまでの身体の居方とは違ったもののように思われました。その身体の動きは、似ていてその内実は異なるものでした。

では昨日私が触れた岩名さんの舞踏が如何なるものとして私の身に映ったのかを率直に述べ

させていただくことにいたします。

薄暗闇に浮かんだ岩名さんの身体は、これまでの居方とは違っていたと先程申し上げましたが、それはどのようなことなのかを具体的に申し上げますと、そこには舞踏家・岩名雅記という個的な肉体とは別の精神的実体として存在するモノ(命・神・霊・魂)が個なる肉体を超えて息づき、森羅万象の根源をなすモノの気が肉体から開放され、研ぎ澄まされた自由な精気としてそこに在ったということでもあります。更に言えばそのモノの気は、常世の死者の霊や魂、現世の人魂の想いを時間を越えて過去と現在とを自由に行き交い、時には魂が荒振る荒魂に、また時には平和を願う和魂のごとく、時には幸魂の如く愛を望み、時には真理を求め探求する奇魂の如く四魂が交互に立ち現れては消えてゆく、魂が自由に変容する身体として目の前に立ち現われ、我々の身に対峙し問い掛けてくるモノとして在ったと強く感じたということでもあります。

私がおのように感じとった大きな理由の一つに、当日観た「うらぎりひめ」との相乗関係があったのかも知れません。しかし、岩名さんが撮られた映像の世界においても、私が岩名さんの舞踏から感じ取ったモノと同様の靈魂が時空を超えて自由に行き交い、我々に語りかけてくる声を聞き取ることができたと言えます。特にそのことを強く感じ取ることができた映像は、岩名映画の特徴の一つとも言えるかと思われませんが、物言わぬ大きな木々のそよぎの映像であります。全編を通して幾度となく映し出される木々の映像は、ただ単に場面転換のためだけの役割としてあるのではなく、それまで映し出された事象を一旦無に帰し、映し出される木々の無言の映像が、風のそよぎと共に時空を越えて魂の声をあげ語り出す場面でもあります。ある意味舞踏に深く通じる映像であるといえましょう。

最後に、少し気になるところをあげさせていただきます。それは「うらぎりひめ」の終章におけるかなり現実的な批評を交えた語りの場面であります。その言わんとするところは余にもリアルで、またこの映画の主題となるところであるということは理解できますが、映像の在り方において語らずして語るができなかったのかと無理なことを言って私の所感とさせていただきます。

この度は本当に有難うございました。また機会がありましたらお会いできることを楽しみにしております。

平成25年3月3日・私信 富田 利秀(元雑誌編集者)

『朱霊たち』何度も映画館で見ていたんだけど、字幕が英語版だったのは初めてだったかな。

友人も言っていたんだけど、日本人、フランス人、イタリア人の舞踏家さんが役者として登場していてそれぞれの言語でやりとりをしているんだけど、不思議と違和感がない。

しかも字幕は英語。ココは何処なのかしら？という感覚になる。

「生きている」5人が死を待つ、ガスが入れられる部屋で、「死体」のはずのカケラが『朧月夜』を歌い出すシーンはやっぱりちょっと涙ぐんでしまった。宴会のシーンへ入る時の横になっているヒヅメのカラダがアップになるシーンが実は好き。身体ってあんなんだ、っ気付かされる。

『夏の家族』は見れなかったので、『うらざりひめ』を

岩名さんはカラーだと色が多すぎるといわれていたけど、カラーの分、人以外のモノがより語り出すような感じがあったと思う。女性の着物、植物、家具、便器とか。その視点から考えると、不思議と現代編のモノ達は、あまり語りが少ない気がした。公演のベンチとか、道路とか、渋谷の街とか。時間をあまり孕んでいないというか。モノクロのほうが時間が凝縮されるのかな。

以前も書いたけど、『うらざりひめ』を見ていると、自分のカラダが色んなものとの相互の関係にあるものだと改めて感じる。僕のカラダは、便器で、家で、空気で、食べ物で、、、それは、「命」を獲得するものかもしれないのだから。だからこそ施しではない、compassion=慈悲（苦しみや悲しみを共にあるものとして生きること）を持って、そういったモノたちと接したいな、って思う。月並みだけど、compassion=慈悲って、今の世の中で、少なくなってきたものだと思うので。

『うらざりひめ』今後の上映が広がって行く事を願って。

Face Book より転載 田村 久（広島上映担当）

孤 独をむしろ選び取る。心に響きました。たうみさんの存在感、若い主人公の顔を隠す、人よりも物を写す。便器・・・よかったです。「朱霊たち」ではフランス人の主人公の顔のUPが私には過剰に感じられ舞踏シーンも迫力がなく感じられましたが、今回は映画そのものが岩名さんの舞踏でしたね。岩名さんは着物の女性 を色っぽく扱うのがうまい。着物の柄、白足袋などの細部が目に残っています。戦争、特高、3.11・・・激しい怒りを感じました。風化させてはならないと再認識しました。

Face Book より転載 小林嗟峨（舞踏家）

キッドアイラックアートホールで、『夏の家族』『うらざりひめ』佳作。1回しかみていないか

ら、まだ、よくわからないが、監督が昭和20年生まれだから？か、破壊と誕生がテーマか？二本とも、こだわっている部分がかかなり共通している。『夏の家族』のラストは鳥の卵と雛のカット（『うらぎりひめ』でも卵のカットあり）。特徴は、俯瞰、主観カット、ぬめぬめしたものが通過するイメージ、鏡を利用している、水辺り、髪が広がる、身体的一部分たとえば足先など。『うらぎりひめ』の過去編の主役の大澤由理さん、逸材。（舞台の俳優より）映像の俳優には、皮膚感覚、瞬き、目の玉が重要になってくる？と思うが大澤さん、いい。パンで広い画を撮影する機会が多いが、『夏の家族』では、ラスト近くの草を燃やすシーンと女性二人の会話シーンに移動あり。『うらぎりひめ』ではテーブルの上の工具をとらえるカットが移動だったのでは？『夏の家族』では牡蠣のシーンと野菜のシーンに通過のイメージあり。『うらぎりひめ』では、男性が飲み込むシーンに通過イメージ

円尾敏郎 「覚え書き／3月1日」より転載

<http://geocities.yahoo.co.jp/gl/maruotoshirou/view/201303>

真実を語れない芸術は片端である。

真実を語らない芸術は詐欺である。

「映画作品」としても「舞踏作品」としても壊れたこの作品によって、岩名雅記は3.11以後の「似非芸術」と「似非日本人」を糾弾する。

これはテロの映画ではない。この映画自体がテロである。そして芸術は常に〈テロ〉であるべきだ。すべての日本人とすべての日本のアーティストは、岩名雅記と刺し違える覚悟で映画館へ行け！

Face Book より転載 石川雷太（美術家）

岩名雅記監督『うらぎりひめ』を見た。敗戦後六六年経った今日、共に苦しみ、喜ぶ環境は失われ、貧しい者を差別し、沈黙することによって権力を支える。そのような傾向に対して強烈な批判を与える作品である。しかし重要なのは太平洋戦争末期の暴力を受けた女性が六六年後の今日に予科練を含める刻まれた記憶を辿り悪に立ち向かう物語にあるのではなく、空間をとらえるカメラワーク、時間軸の構造、映し出された画像といった、舞踏者である岩名独特の映画の特質を見る者が捉える点にある。すると見る者と見られる者という立場が逆転し、見えるものと見えないものの区別が消失する。我々は「見ることは力ではなく物を通り抜ける方法」

(C・カスタネダ)であることを思い出さなければならない。すると、我々が如何に普段何も見ないようにしていることが理解できる。我々は、これから何を見なければならないのか。スクリーン作用のためか、時折、煙が立ち昇っているようなシーンに、私はM・ブルーストが道端の石を叙述した箇所に近代の始まりを見出したW・ベンヤミンの『パッサージュ論』を思い起こした。「いま、ここ」とどのように向き合い、対処や対応というよりも闘争しなければならないのかが、我々に問われている。

2月28日「テルプシコール通信」より転載 宮田徹也（美術評論）

試写ですが、とても面白く拝見しました。

確かに難解な作品であるとは思いましたが、

難解な映画に浸れる心地よさも同時にありました。

座敷牢でのほとんどセリフのない、反復されるシーンの数々も

何故だか心地よく見ることが出来、全く退屈することがありませんでした。

最後の老女の行動にも、恥を持って生きてきた、という心情もひしひしと伝わってきました。

映像の美しさもあるのですが、観た後、しばらく「うらぎりひめ」が残りました。

私信・映画雑誌関係 C 氏

久々に感性を刺激させられる映画でした。

物語を追うというよりも、

そこで何が起きているかというのを感じる映画ではないかと思いました。

僕がかなり前に夢中になって、食べるように観ていた、

寺山修司監督や実相寺昭雄監督の、一連のATG作品を思い出しました。

最近はTVドラマやコミック原作など、わかりやすいような映画が多いですが、

「うらぎりひめ」のように、先の展開が予測できず、

映画の中に身を委ねるような作品が少ないような気がします。

日本の映画界にも、もっと感性を刺激するような作品が出てきてほしいものです。

そういう映画を撮れる人も、もう少なくなってしまうのでしょうか……。

小原雅志（ライター、映画評論家）

……いままでの岩名さんの監督されたふたつの作品で、わたしはいずれも

「ドキュメンタリーとの勝負」のような側面をわたしなりにうけとめて、それがさいきんの多くの映画作品にみうけられる「疑似ドキュメンタリー」的なものの極北にあるというか、「極北」というのがおおげさであれば、岩名さんの「映画」というあり方への問いかけ、そしてそれぞれの時点での「回答」として受けとめさせていただいたのだけれども、こんかいの新作もまた「ドキュメンタリーとの勝負」であり、さらにそこに「映画の記憶」とでもいえるようなものをも折りこまれた作品、という印象をうけた。そこにはたむらまさきさんの「シネマトグラファー」としてのキャリアもまた折りこまれ、まさに「映画とは何か」というような作品として、わたしの目のまえにあらわれたおもしろい。映画というものをストーリーを紡ぎだすものとして観たりしない方、映画の表現そのものにきょうみをもたれている方にはぜひ観ていただきたいすばらしい作品だとおもう。(中略)

この作品はそんな映画ファンをだけ興奮させるようなマニアックな作品ではなく、もっとアクチュアルに、この映画自体としてきょうれつなインパクトをもった作品だとおもう。映画のなかでふたつ、みつつ、もしくはそれいじょうのシチュエーションが、ずっと並列して提示されるのだけれども、これが後半の印象的な「地唄」がながれるときについに干渉しあい、現在形での復讐のドラマがはじまる、またははじまりそうになる。このあたりの「声の吹き替え」というのも印象的。これはここで書いてしまっただけなのだけれども、じつはここで観客もまた「うらざり」を体験させられてしまう。(後略)

小坂圭司(イベント crosstalk 主宰)

全文は <http://d.hatena.ne.jp/crosstalk/> 参照のこと

舞踏を映画にするとこんな感じか。身体感覚が伝わってくる。清濁あわせた生(もっと汚くても.....w 耐えて超える自分のその瞬間を味わいたい)。

ストーリー情報は予め入れずに見たので、あとで「そういうことだったの？」というのはいろいろあったが、観ている間、私にとってストーリーはまったく関係なく、台詞自体も(意味を排した)音として、それ以外の絵と音に没頭した。

映画やパフォーマンスに感動とか感激とか涙とか文化文明の上に付与されるものを求める人は、こういう作品をどう観るのか興味はあるな.....

私としては、映画を見た、というよりパフォーマンスを体験した感じで、文化や文明というものを自分だけの方法で捉え直すこと、またその意味を考えてみようかという気になった。

Face Book より抜粋 野々宮 卯妙 (朗読家)

「うらぎりひめ」は見えている映像の中に潜んでいるものを、嗅ぎ分けることにより、社会や歴史や個人史や、今の自分の立ち位置を純化させて、ささやかでも生かされている素晴らしさの気づきになりました。

山本典子（元舞踏写真撮影者）

（前略）

この映画の本質は「身体感覚」だ。

監督が舞踏家だからいうのではないが、映像には肉体の感覚、するどくとぎすまされた身体性、感受性、そういったものなしでは成立しないものが打ちこまれている。

手触り、におい、味、音、エロティシズム、しかもただそこにあるのではなく、岩名氏によって強くつかみとられ、そこに、キャンバスに色彩を置くように塗りこめられている。

舞踏家が映画を作ったらこうなった。

では、舞踏家が小説を書いたら？

舞踏家が音楽を演奏したら？

舞踏家が絵を描いたら？

舞踏家が朗読したら？

舞踏家でなくてもいい、表現者がみずからの身体感覚をきびしく自覚し、感受性をとぎすませたとき、作品はどう変わるだろうか。

映画を観終わったとき、私は思考を自分のほうに引きよせ、そんなことばかりかんがえていた。（後略）

水城ゆう（ピアニスト、作家）

全文は http://juicylab.blogspot.fr/2013/02/blog-post_5890.html 同氏ブログ「水の反映」参照のこと

過去のシーン...音は最低限で台詞もない。しかし、私はスクリーンに映し出される身体が雄弁に命の音を奏でるのを見た。現代のシーン...監督はその主人公になお多くの台詞を吐かせた。それ程までに原発に対する監督の思いは溢れ出て収まらないのだと思った。

音楽と台詞と効果音で全編が埋め尽くされた映画を見慣れた私にとって、「うらぎり姫」の静寂さは新鮮でありました。緊張の糸が途切れることなく、音の情報が少ない分、少しの映像も見逃すまいと食い入るよう見ました。

ツイッターより転載・nobi_syounen

岩名様

「うらぎりひめ」拝見致しました。

命ある者は慎ましく、動けぬ者は声を上げよ…

生き物たる命は何億年の中の一瞬…

でも、かけがえのない命を全う出来ない時代は、終わっていない…

むしろ、規模は大きくなり、比例するように無関心になっていきます…

うらぎりひめのメッセージは、私の心に響きました。

蹄鉄の傷が、敗戦の日に呪縛から解き放たれ、命という光りに変わる歓喜！

自国の無責任さに命を奪われる虚しさ

彼女の内なる声と覚悟は、国に殺されて来たけれど、声を上げずは加担を意味すると…私たちひとりずつへの問いかけです。

思わず、魂が震え、涙しました…

まずは命を授かる性である女性たちが、どんな意識を持って、自分の生き方でこの時代を営むのか…

1人の弱さを認めて、光を探す…

身体に染み込んだ意識と経験の細胞の蓄積が、岩名さんを支えていらっしゃいます。

私たちは無責任に無意識に享受していた原発エネルギーの恐れを、現実の恐怖として2年前に怯え、怒り、悲しんだのに…

もう、彼方に置き去りにしています…

自民党になり、原発推進に舵を切り始めた今、私たちに出来る事は？

広島、長崎、ビキニ第5福竜丸、福島へと…

昨年、葉山の美術館でペンシャーン展を見ました。

第5福竜丸の事を描いた絵があり、被爆死亡者の船長の久保山さんの作品は福島美術館所蔵で、因縁を感じました。

ベンシャーンのこれらの絵にアーサーピナードが詩を付けた「ここが家だ」は素晴らしいです。

去年の首相官邸前でデモでバッタリお会いしましたが、この作品への、会話のエッセンス、
肉体や自然の恵み、風や光の仕草という呼吸の映像はやはり舞踏かと…。

これが岩名さんの矜持なのです。

ありがとうございました。

私信・山本典子(元舞踏写真撮影者)

過去二作くらべ直接的な部分ではありますが、こことそこをつなぐ物語は
いままで以上に感じられました。

終わった後、すごく吐き気がしました、自分のなかの毒と今受けた感情で
もう一度観たいです。

ツイッターより転載・加藤 淳

いろいろな思いが浮かびました。勇気もいただきました。

素晴らしい作品をありがとうございました。

ある意味で幻想を作るのが私たちアーティストの仕事です。しかしその幻想を逃げ場に使って
いるアーティストが多いのも事実です。僕は多くのアーティストにこの映画を見てもらい、な
ぜ岩名さんがこのような映画を作らなければならなかったのかについて考えてほしいと思いま
す。

Face Book より転載 石川雷太(美術家)

美しい映画です。岩名さんの怒りがこれほど強く、深いとは！息づかい、その心情に圧倒され
ました。ただ岩名さんの意うように映画が孤独なからだだとするならば、いささかじょうぜつ
が過ぎるという感想も持ちました。

私信・古川誠・西日暮里『童心舎』主人

Masaki. Je viens de regarder ton film aujourd'hui, j'ai pleuré et je suis allez faire

du vélo dans la campagne pendant 3 heures.

merci.

Michel Doneda

マサキ。君の映画を今日観たよ。僕は涙して田舎を3時間ほど自転車で走った。ありがとう。

私信・ミッシェル ドネダ（音楽家）

『うらぎりひめ』は野蛮で精緻な爆弾のような映画だった。「モンタージュとは異質なふたつのイメージの衝突だ」という言葉に従えば、この映画には原初的なモンタージュの楽しみが満ち満ちている。例えば、どこかの屋根裏のような場所に幽閉された和服美少女が覗く窓の外に広がる、ジャポニズムからあまりに遠い緑と光の鮮烈さは忘れ難い。どんな時代劇でも味わえなかった飛躍するイメージの愉しみがここにはある。

大澤由理の抑圧されたエロティシズムが解放される川岸のシークエンスが美しい。その宙を舞う白い腕を捉えたショットの豊かさに息を飲むのは、舞踏家としての岩名監督の視線が、アクションの全体ではなく、身体の細部へと向けられているからだろうか。その凝視する熱量が心地よいのだ。

映画の記憶とか映画の知性とか、そんなものはどこふく風と自由に吹き荒れるイメージの衝突は痛快の一言で、時空を行き来しながら観客を翻弄し「うらぎり」続け、怒濤のクライマックスへと導いていく。情念とユーモアに溢れた圧巻のラスト20分を目撃するためだけにでも、この映画は見る価値があると断言できる。映画は爆発だ！ 見れば分かります。

寄稿・深田晃司（映画監督）

映画を拝見した直後、実はそのまま黙し帰り密かに静かに大切に反芻したい気持ちでいっぱいでした。この複雑な全方位的な映画を言葉にするには表現がたいそう難しくありきたりな感想を述べることができずずっと悩んでいました。それは現実の世界にも通じていて絶え間なく続くこの不吉な微妙な揺れに自身が楔を打ち得ないことに似ています。

個が何を考えどう行動していくのか更に『現在』を紡いでいく、映画を観ましたで終わらない骨の太い構造がしっかりと生身に食い込んでいます。

生きていくことが言語を立ち上がらせる。たうみさんはじめ人を含む自然の豊かさ存在の確かさが繊細に強靱に描かれていました。

私信・小松 亨（舞踏家）

舞踏家でもある岩名雅記監督の新作映画『うらぎりひめ』の試写を観た。岩名の3本の映画の

中ではこれがベストなのではないか。明確なテーマと無駄のない簡潔な展開で一気にラストまで連れていかれたという印象である。ドキュメンタリーを騙り、主役の老女優の劇中劇を組み込むという劇作術も見事な効果を発揮している。更に過去 2 作のように岩名の個人的な記憶の中にしか存在しない東京ではなく、現在の東京の風景に初めてカメラを向けた点もこの作品を私小説的な狭さから解き放っていると思う。

だが違和感も残った。この作品の中心的な狙いは戦前の絶対天皇制による軍国主義ファシズムが実は戦後になってもフクシマを齎した原発翼賛体制という形で続いていることを暴き出すことにあると思う。その狙い自体には共感するものの、映画の中でその連続している抑圧的な体制に向かって敢行される老ヒロインのテロは結局死＝虚無へのロマンティックな跳躍なのではないだろうか？それは日本浪漫派という敵の土俵で相撲を取ることに他ならないのではないか？戦中の回想シーンに度々登場するヒロインと許されざる関係だったと思わせる特攻隊兵士のイメージといい、ミイラ取りがミイラになってしまう危うさを私は感じてしまったのである。

Face Book より転載・竹重伸一（舞踊批評家）

「便器」という日常性の中にこそ、「国家」という得体の知れない魔物が存在すると暗喩させ、「科学」という神話の崩壊が、冷徹さを加えて私たちの体に伝わってくる。

岩名雅記彼自身に宿る身体表現の領域は、一向に衰えを知らない。

さらに、釈迢空（折口信夫）の歌を引用したことが、作品の勝利に拍車をかけてしまった。

寄稿・川井田博幸（映画プロデューサー）

『朱霊たち』、『夏の家族』と観てきたが、この『うらざりひめ』で岩名雅記映画が確立したのではなかろうか。美しく、突き抜けた素晴らしい映画です。

私はみているうちに、この映画の見事な演出、独特の美しい絵に恍惚となり、ひとつひとつの言葉が身体に沁みた。そしていつの間にかこの主人公の女性のからだにとけ込んでいた。

なんと観終えたときの、爽快でパワーに漲ってることか。

とらわれてる過去や権力から脱出するには、自分自身からそこに飛び込まなければいけない。弱い者こそ、そのひとつの勇気が大事だと思い知らされる。命は尊い。今の日本でそれがわかる者ならば、誰が観てもその思いは共感できる作品だ。

Face Book より転載・原口真由美

岩名雅記監督の「うらざりひめ」を観た。

正直、舞踏家であられ映画監督であられる岩名氏のことを、私は存じあげなかった。在仏の岩名氏が、私の主宰する脚本家集団にメンバー登録されておられたことすら――。

ある日、その脚本家集団のメーリング・リストに、岩名氏から「うらぎりひめ」の試写会の案内がアップされた。私はすぐに拝見したいと思った。舞踏家であられる氏が、60歳を過ぎてから映画を撮り始め、これがすでに長編三作目だという。

そこに計り知れないモチベーションを感じたし、フランスにありながら「日本を撮る」という出自の違和感にそそられた。

私事で恐縮だが、私は長い間「変な映画」を求めてさまよい歩いている。身に染みついてしまった商業映画のシナリオ作法から逃れるために。

そういう意味で、岩名監督の「うらぎりひめ」は紛れもなく「変な映画」として甘美な怪光を放っていた。

3月1日からの上映では、氏の前作「朱霊たち」「夏の家族」も再上映されるという。

また刺激を受けに劇場に足を運ぶこととなろう。私は、岩名雅記氏のパワーの源と作家性を、更に見極めたいと思う。

寄稿・三村 渉（脚本家）

映画『うらぎり姫』

縁あって試写会にお邪魔しました。

監督の岩名氏はかつてダンサーとして、まだおこちゃまだった私の脳味噌をガツンとやった人です。

あの踊りをする人が映像の世界で外すはずがない。何か確信をもって試写会場に赴きました。そしてやはり岩名氏は、今度は映画を作る人として崖っぷちに私を立たせることとなるのです。認めたくなかった…。

ストックホルム症候群ってご存知でしょうか？

監禁された女性と支配者。地唄が描写を支えます。

うら若き女性の口から吐き出される老人の声の地唄。

和紙に封じ込められた、行為と存在の証。

あとに地唄の歌詞を知り、その印象は深まります。

主人公の女性はやっぱり、支配者であった男性を愛していたのでしょうかね。

監禁されている人が監禁した人に、強い愛着と憎悪を覚える心理はよくわかる気がいたします。

そしてこの映画を見ているうちに、次第に、抑圧していた自分の一部を解放せざるを得ない心

境になりました。

この作品、一見、時代や男性に翻弄され抑圧されている女性を描写し、その復讐と解放までを描いた作品にみうけられます。

だけれども『うらぎり姫』は、姿形を変え、老若男女問わず、国籍を問わず、私たちの中に介在していることに気づきます。

私たちも思想や宗教ひいては国家や民族という集団のとらわれ人、即ちかの病態の中にあるのです。

また逆も然りでしょう。共依存の連鎖。今の日本を形成しているのはまぎれも無く私たちに他なりません。

東日本大震災と原発事故によってその事はあらわになったのではないのでしょうか。認めたくはありませんが。

終盤、老女に成長した主人公が、呪いの言葉を哲学的なラップ？に載せ、機関銃のように詠い上げます。

この場面は、もう鳥肌ものの快感です。

究極の、絶対的な孤独を得ることができた者だけに吐ける言葉。

3.11 を経た私たちへの言祝ぎですらあるでしょう。

Face Book より転載・天人唐草

映画「うらぎりひめ」試写会。66年前に全てを失った国がまたしても敗戦を経験してなお繰り返す無関心。反省は生かされない。囚われの「うらぎりひめ」は食べるために体を曝すのだ。そこには自立も自尊もない。垂れ流しの空間から抜け出し一突きを夢

ツイッターより転載 中村秀夫

舞踏家、岩名雅記さんの三作目となる新作長編映画「うらぎりひめ」の試写に先日参加させて頂きました。

まず、今までの岩名作品とはカメラワークの細部、動きが違うという感覚が映画の冒頭から僕の頭に突き刺さる。

もちろん今まで通りの岩名さんの世界がはっきりと見えているのですけれど、より繊細さが増

したと感じます。

地唄。三味線は聴こえてこないけれど、それがこの絵にはふさわしいと思う。この地唄と便器が時空の句読点という大きな存在として僕に迫ってくる。便器をこのように扱うというのは岩名さんにしかない感覚なんだと思う。というか僕には絶対出来ないな、便器を全面にもってくるといえるのはという感じ。

地唄、時空の窓としての便器、廃墟、強く印象的に迫ってくるのですが、七感弥広彰さんの存在感、過去を演じる大澤由理さんの顔をなかなか見せることがない作りに緊張感が持続し、現在を演じる、たうみあきこさんのあるがままの存在感が迫ってきます。たうみあきこさんの最後の方の劇の力強い演技も感動的ですが、なぜかよろよろと歩く家路シーンが感動的でした。

地唄と静寂に響く物音が、この映画のサウンドトラックという風に展開していく。所謂映画音楽というか西洋音楽による劇伴が排除された状態で進む中、シーンが過去現在を往復することで素晴らしいリズムを作り出している。そして最後の方で2回だけ力強く響くチャイコフスキーの弦楽セレナーデがあまりにも効果的。

Face Bookより転載・平石博一（作曲家）

映画の中に見る“身体”というものがある。最近、見た映画の中では舞踏家でもある岩名雅記の「うらぎりひめ」が印象的であった。もちろん監督が舞踏という身体表現をしているので、それが直接、反映しているのだから当たり前だと反論されるかもしれないが。映画自体にも“身体”のあるものと無いものがあり。この映画の中における「ひめのしんたい」から僕は目がはなせなかった。

ここでいう「ひめ」とは「秘め事」であって、いまだに形だけの「姫」への抵抗であって。「うらぎり」とは「裏」にある利権がらみの男性原理の社会への果てである「切り」であって、それこそ未だ「霧」だらけの男性原理をぶち抜く「キリ」だと思う。おそらく＜群馬のおやじ＞なら原子力で、この「ひめ」は黙らせられると思うのだが、どっこい＜やまとのめのこ＞は、そうはいかない。ラストに垣間見る晴々しい少女と老女の表情を見よ！潤いなければ感じない、映画を観終った後、偶然聞いた僕の知り合いの女子の感想だ。「ひめのしんたい」に辿りつくため男たちは今日も肉体と視線の労働にいそしむ。

寄稿・加納 星也（批評家・文章家）

岩名雅記監督の新作「うらぎりひめ」の試写会にでかけてきました。監督一人で映画の宣伝からモギリまで行っていました。

映画作家、岩名雅記の注目すべき作品であることは確かです。見る者の視座が問われる映画。誰に褒めるべきか迷うところです

Face Book より転載・森下隆：慶應義塾大学アート・センター所員

先日、岩名雅記監督の『うらぎりひめ』を試写で拝見。“身体映画”とはこういうことかと鑑賞中ずっと緊張状態。滑らかな身体、悦びの身体、そして怒りの身体が新たな文法で結びつき観客に向かって刃を向ける。突きつけられた切っ先を俺はどこに向けるのか？

ツイッターより転載・土屋 豊（映画監督）

岩名雅記監督の最新作「うらぎりひめ」の試写を明大前のキッドアイラック・アート・ホールで観た。ことばで表現するのが難しいが、実験的というか、メッセージ映画というか……。要するに、戦争責任者と原発推進者の無責任を撃つ映画だ。

前半はちょっと単調だが、エンディングが過去の戦争責任を問っているようで、まさしく3・11後の放射能に汚染された日本社会と、庶民が戦争を堪え忍んだように原発事故に耐えて押し黙っている2012年年末の、総選挙で脱原発政党が惨敗した社会に対するゲキのようでもある。戦争時代を日本軍将校（ママ）の慰み者として困われて生き延びた女性が、戦後66年、都内と思われるある公園でかつてテレビ局の社長（ママ）と思われる老紳士と出会い、仕込み杖で殺ろうと試みるが（ママ）……。「本当は群馬県のおじいちゃんを殺りたかった」と独り言を言いながら（ママ）緑色の血を流して……。

エンディングを公表してしまっただけはマズイので、この程度にしておきたい。「群馬県のおじいちゃん」で、私は顰蹙を買うほどに思わず吹き出して思い切り笑ってしまったのだが、その意味がわかる者は原発事故を呪っている者だろう。

映画は何もハッキリとは表現しない。が、事故後も原発推進する「諸王」の無責任と、かつての戦争の責任を撮らなかった王の無責任を問い、何事もなかったかのように奢り高ぶった生活を続ける私たちに対して、抵抗することを、声を上げることをアジるメッセージを感じた「うらぎりひめ」。

ツイッターより転載・山本宗補（フォトジャーナリスト）

岩名様、本日は映画「うらぎりひめ」の試写会に招いて頂きありがとうございました。91 分間金縛りにあったように観ました。映画がはじまって間もなく主題が私たち自身の犯した自慰と無知を描いているのだと分かりました。正に“二度目の敗戦”を経験してなお反省することない日本に生きる怒り。

ツイッターより転載・中村秀夫

明大前のキッド・アイラック・アート・ホールで岩名雅記『うらぎりひめ』の試写。熱が頭へのぼりすぎたまま4時間位経った今も下がらない。敗国の劫火が過去と現代を呑み尽くす。岩名雅記は怒っている。

祈りが深いほど人は孤独になる。うらぎり姫の衣の裳裾が一時間半ひきずられ、舞い踊る軌跡に視線だけでなく五体もろとも釘づけ。大きな水槽に黒魚のようにひろがる黒髪に息を呑んだ。『うらぎりひめ』上映はキッド・アイラック・アート・ホールで来年3月！

ツイッターより転載・鏡谷真一

この映画ドキドキします！

私信・早川誠司

昨日、舞踏家 岩名雅記さんの新作映画の試写会で、「うらぎりひめ」を観て来ました。

「日本に原爆が投下され、以来、日本は経済成長を遂げ現在に至り、今度は他国からではなくこの国が自ら歩んで来た結果として、再び原発による悲惨な負の遺産を背負い込む」という受け入れがたい現実への感情を表出させた作品として拝見しました。

映像が美しく、具体的な物や事を通して思考が抽象化されたおもしろい表現方法がとられています。身体の動きも含め、完成度の高い優れた表現だと思いました。

私自身は、原発の問題は根本的には大国間の軍事力/核兵器の問題と切り離せないと考えているため、映画の主旨とは観点が少し異なり同意できない点もあるのですが、拝見していて、この国が急激な経済成長と共に得たものと失ったものについて思い返していました。

Face Book より転載・阿部尊美(美術家)

結果としてあの映画は何を訴えたいのか何度も言葉を繰り返すので良くわかりました。ただ私達二人共文学、芸術、感性に欠けているのか鈍いのか疎いのか視野狭く現状に甘んじて生きているのに慣れてしまっているのが災いしているのか、時折どうしてこの映像が繋がっていくの

か理解に苦しむという部分が多々ありました。でも前にお邪魔した折に見覚えのある風景、美しい情景に感銘し、萌野さんりゅうと君とジャガイモ畑には微笑ましく見させていただきました。

何れにしても岩名さんの周りの世界では大変な成功を納めたようで、映画の中から感じる未だ衰えぬ情熱、エネルギーには感服いたしました。お目出度うございます。

私信・小野耕三、美代子

うらぎりひめ…朱霊たち、夏の家族を超える気持ちよい映画でした。

最近、若い鳴り物入りの批評家だったり映画人を語る人達に殴りつけて見せてやりたい作品です。有り難う御座いました。

ツイッターより転載 SANO TOMOMI

政治的メッセージと、(芸術的ではありますが) 暴力的、エロティックなシーンも多々あるので上映は配慮が必要だと思いますが、このストレートすぎるメッセージを、今、伝えなくてはならない、今じゃなかったら、永久にできないと思いました。

私信・Rei Nakazawa (アーティスト/関西上映を工作中)

若い頃のATG 映画を思い出しながら拝見しました。3-1 1は私も第二の敗戦と位置づけておりますが、日本国には一向にそのことへの徹底した自覚がなく(あるいはたちまちにして消え)、国論は衆院選を前にして右へ右へと狂奔するがごとしであります。

たうみあきさんの存在感に圧倒されました。大兄の孤独なたたかいに、ブランキのそれが重なります。はるか豊橋の地より大兄の<孤独>と<怒り>の一翼を担わせていただきます。道浦母都子の烈風に揉まれる<旗>が印象的でした。あの疾風に揉まれる道浦さんの旗と屹立の鋭さが、大兄の私生活にまで及んでいたとは! ぼくが倒れると一つの直接性が倒れる、という吉本隆明の1行は、今や岩名さんのものになった感じです。

上映の成功を祈ります!

私信・浜本正文 (オーギュスト・ブランキ「天体による永遠」岩波文庫版訳者)

“監督”の想いが伝わってくる“映画”

主人公の老女が執念深く思いつづける「孤独」と「命」。また、今の日本への怒りと批判が日の丸や権力、弾圧、政治犯のポスター、玉音放送、原発事故を思わせる描写等々で執拗に表現され、さらに老女の娘時代が過ぎ、監禁という蔵の中の日々が、現在の日本の愚かな閉塞感なのだと直裁に訴えてくる。

その蔵の中の便器の存在が面白い。便器の底には、彼女の想いや過去、或いは現在の日本は糞同然という意味合いが凝縮し、そして交錯をし、イメージが構築されていく。

ラストでは、現在の日本の滅び（終焉）が漂い、或いは、「そうさせてはならない」という今を生きる者への想いなどが暗喩として描かれる。実に、さまざまなイメージを喚起させる媒介としての便器が存在感を示している。

映画を観終え、岩名監督の今の日本と日本人への怒りがひしひしと、そして激しく伝わってきた。

寄稿・松井良彦(映画監督)